古フランス語音韻試論
—「ヴェルジ城主の奥方」研究—

篠　木　平　治

Essai de la Phonétique Historique de l'Ancien Français
—Etude Linguistique de "La Chastelaine de Vergi"—

Héiji Shinogui

Résumé

Cet essai tente d'illustrer sommairement les faits essentiels de l'évolution phonétique du latin au français, en examinant tous les mots de "La Chastelaine de Vergi", poème du XIIIe siècle.

Bien qu'on se borne à décrire les faits à partir de la matière qui apparaît dans le texte, on voit que dans l'ensemble on a chance d'en retrouver presque tous les principaux points.

On sait que tout n'est pas encore clair dans le domaine de la phonétique historique de l'ancien français. D'ailleurs les datations des changements phonétiques diffèrent souvent suivant les chercheurs, mais ce qui importe, c'est la chronologie relative.

Dans cet essai, Voyelles-Première partie, on ne traite que les voyelles innaccentuées, en les divisant en deux chapitres, A. Réduction, B. Conservation.

13世紀のイル・ド・フランス州のほとんど純粋な言葉で書かれ，中世北方フランス語の典型とされる恋愛詩篇「ヴェルジ城主の奥方」(1)に現われる全ての単語を点検し，ラテン語から古フランス語への音韻変化をあとづけ，当代の古フランス語から中代フランス語を経て近代フランス語に至る語形の変容を明らかにする。

未だ歴史の浅いフランス語の史的音韻論は，音韻・語形などに関して全てを明白にしているのではない。語源の定かでない語もあり，鼻音化の問題などには未だ定説を成すに至らない分野もある。音韻変化の年代推定も学者によって異なる場合が多い。しかし，大切なことは音韻変化の時代順である。妥当と思われる諸説を付記するにとどめた。

本論は出発点としてテキストが提供する事実に限らざるを得ないが，全体としてその本質を概観

(1) La Chastelaine de Vergi, poème du XIIIe siècle, éd. G. Raynaud et L. Foulet, CFMA, 4e éd., 1967.

することができる。

母音Ⅰでは無強勢母音のみを扱い，ラテン語がフランス語へと推移する過程で消失する母音と保持される母音の二つの項に分けて論じる。

なお，音韻変化の例外となる事実は大部分類推による語形の変化によって説明することができる。可能な限り脚註に記して本文の煩雑さを避けた。

この試論はソルボンヌ大学の Monsieur Arveiller に負うところが多い。

古フランス語音韻試論

母音 I　無強勢母音

A. 無強勢母音の消失

ラテン語がフランス語に変容する過程で，一般に，アクセントのあるラテン語の母音はフランス語に残るが，アクセントのない母音は消失する。

1. 語末から二番目のアクセントのないラテン語の母音は消失する[2]。

Discópĕrit > descuevre 5, ŏpĕra > uevre 6, áltĕru > autre 13, dŏmĭna > dame 20, terminu > terme 32, caměra > chambre 37, cognĭtu > cointe(s)43, dicĭtis > dites 75, sĭmilat > samble 141, fēmĭna > fame 152, trémulant > tramblant 179, remémorat > rememble 180, *cupĭdietat > covoite 225, dēsíděrat > desire 225, perdĭta > perte 228, cómpŭtat > conte 246, árbŏre > arbre 389, fabula > fable 513, tabula > table 514, *sŭffĕrit > sueffre 560, tŭrbŭlat > trouble 724, aurĭcŭla > oreille 846.

しかし，母音間の子音の脱落によって語末の母音と二重母音を成し，やがてこれが単母音化する場合がある。：Sarcophagu (gr.) > *sarcŏfau > *sarcŏfo > *sarcŏwo > sarqueu 937.
なお，doie 78 を dĭgĭta に由来するとすれば，弱音節の i はアクセントのある i に融合したものである。Plait 103 も同様である：Placĭtu > pla(y)yĭtu > *plaito > *plaido > plait[3].
更に，-ĕre 動詞の不定詞にもこの母音の消失がみられる。

*Essĕre > estre 2, facĕre > fere 96, dicĕre > dire 131, quaerĕre > querre 169 (quiere 857), prēndĕre > prendre 175, *pendĕre > pendre 176, credĕre > croire 244, perdĕre > perdre 283, *conōscĕre > (re)connoistre 314, *tragĕre > trere 322, *rendĕre > rendre 466, claudĕre > clorre 477, vivĕre > vivre 817.

2. アクセントのある音節に先行する語中の a 以外の母音は消失する[4]。

*Alicŭnus > aucuns 5, verecúndia > vergoingne 17, vir(i)diárium > vergier 30, matutínum > matin 150[5], *bellĭtáte > beauté 157, *dominicélla > damoisele

(2) この母音消失の時期は，各々の母音と語の子音構成などによって異なり，1 世紀から 6 世紀に及ぶ。
(3) Cf. Pierre Fouché, Phonétique historique du français, p. 459.
(4) この母音消失の時期も，語の構成などによって一定していない。4 世紀から 6 世紀に及ぶと推定される。
(5) この母音の消失は，特に重音脱落によると説明される。Cf. Fouché, Phonét. , p. 475.

255[6], *malifátius > mauvés 302, septimána > semaine 454, fortiménte > forment 467[7], pĭĕtátem > pitié 612, medietáte > moitié 761[8], sanitáte > sante(z) 780[9].

しかし，この母音が閉音節にある場合は保持される：Suspectiŏne > soupeçon 224[10].
なお，felonie (< *fellonia) 680 は felon (<*fellōne) のアナロジーである。
*Superána > souveraine 79 では唇音と流音の間で母音が保持されている。
動詞では未来形と条件法の語形の形成に於て，強音節に先行する語中の母音の消失がある。未来形と条件法はラテン語の不定詞と habere の直接法現在及び半過去の縮約形との結合によって形成され，不定詞が語幹となり，habere の各々の語形が屈折語尾となったが，常にこの語尾にアクセントが置かれた。従って，-ēre, -ĕre 動詞の r の前の e は各々無音化する。

*Mitterĕat > metroit 32, *moverĕat > movroit 33, *videréat > verroit 35, *poterĕat > porroit 65, *perderát > perdra 276, *poterát > porra 290, *saperát > savra 365, *haberát > avra 554.

但し，語幹が唇音で終る場合は屈折語尾の r の前に e が現われる：*Reciperĕtis > receverez 643.
-ire 動詞の場合も同様に r の前の i が脱落する。

*Veniráio > vendrai 142, *hatiráio > harrai 494, *morirĕa > morroie 501.

しかし，語幹が子音＋流音で終る場合はこの i は保持される：*Nutrirĕa > norriroie 123.
Sufferirĕa > soufferroie の場合は，prétonique の最初の母音 e が脱落し，動詞の語幹が子音＋流音となって，e が e̥ として保持され，更に音位転換によって soffrerea が soufferroie となった[11]。
語尾にアクセントをもつ不定詞では語幹の母音が消失する。

*Auctoricare > otroier 29[12], considerare > consirrer 295[13], *paraulare > parler

(6) 最初の prétonique の ĭ は消失したが，二番目の ĭ に関しては，この ĭ も消失したのか，或は保持されて e̥ となり，c＋e から生まれる内破子音の yod と結合して -ei- となったか，いずれかである。Cf. André Lanly, Fiches de philologie française, p. 139.

(7) 後に，この語は中代フランス語期に新しい女性形 forte によって消失した母音が復活され，fortement となった。

(8) ここでは，mi < mĕdiu とのアナロジーによって，子音の後の y が保持され，二番目の prétonique の e が消失した。Cf. Fouché, Phonét., pp. 477, 493.

(9) Verité (< veritate) 241 は学識語である。

(10) Cf. Fouché, Phonét., p. 487.

(11) Cf. Fouché, Le verbe français, pp. 391-2, 402.

(12) *Auctōricáre は Fouché による。Bourciez は *auctorizare を語源としている。Cf. Phonét., p. 457 ; E. et J. Bourciez, Phonétique française, § 148, Remarques II.
語中に prétonique の母音が二つある場合は，一般に，開音節の最初の母音は無音となり，二番目の母音は，開音節にあっても，閉音節にあっても，保持される。Cf. Fouché, Phonét., p. 478.

(13) Considerare の場合は，consíděrat の如く，語幹にアクセントがある語とのアナロジーによって，語中の最初の prétonique の i が保持された。Cf. Fouché, Phonét., p. 478.

300, assimulare > (r)assambler 471, manducare > mengier 509[14], collocare > couchier 517, discoperīre > descouvrir 634.

Demorare > demorer 36 は *demŏrat に影響されて母音が保持された[15]。
-ant の語形，過去分詞，直接法半過去，定過去の形成に於ても，アクセントのある音節に先行するa以外の語中の母音が消失する。

Similánte(m) > samblant 2, *conveniánte(m) > couvenant 23, veniébat > venoit 46, collocáta > couchie 108, *cominitiávit > commença 110[16], *iteránte(m) > errant lll, nominávit > nomma 126, computátu > conté 198, liberáta > livree 826, turbuláta > troublee 924.

なお，テキストには parler の命令形，接続法半過去の語形もみられる。

Parabolávit > parla 58, parabolásset > parlast 215, parabolátis > parlez 504, parabolátu >parlé 506, parabolánte(m) > parlant 507.

3. 一般に paroxyton の語末のa以外の母音は消失する[17]。

Gentem > gent I, lēgāle > loial 2, consllĭum > conseil 3, cēlare > celer 3, vĕnit > vient 5, tantum > tant 6, perdit > pert 9, dĭctu > dit 14, dĕvet> doit 14, subĭnde > sovent 15, dolŏrem > dolor 17, amavit > ama 21, habuĭsset> eüst 50, láudo > lo 70.

但し，語末のi，uはアクセントのある母音の直後にあるときは，二重母音の第二の要素として保持される。

Cui > qui 10, dĕu > dieu 61, pensávi > penssai 194, fūi > fui 410.

Lŏcu, jŏcu を語源とする leu 71, geu 269 の語末のuはラテン語のuではなく，-c-に由来するwを表わすものである。ラテン語の語尾uはoに開いてから消失した[18]。
子音＋流音の後にある場合は，語末の母音はこの子音群を支える母音としてęの形で保持される。

Membrum > membre 179, ad-rĕtro > arriere 243[19].

---

(14) André Lanly は，この母音ūについて，その消失はこの母音にアクセントのある mandŭcat の如き語形とのアナロジーによって遅れたとしている。Cf. Fiches, p. 211 ; Fouché, Phonét., p. 496.

(15) Cf. Fouché, Phonét., p. 497.

(16) 最初の prétonique の i が保持されたのは ĭnĭtiare の影響による。Cf. Fouché, Phonét., p. 478.

(17) A以外の語末の母音は7世紀から8世紀に脱落したと推定される。Cf. Bourciez, Phonét., § 13, Historique; Fouché, Phonét., p. 501.

(18) Cf. Fouché, Phonét., p. 506. なお，ŭ >0 の変化は5世紀前半である。Cf. Ibid., p. 197.

(19) 子音＋流音以外でも語末に母音をとどめることがある：Inversus > enverse 863.

形容詞 large 389 の語尾は largu > larc に女性形の語尾が付されたものである[20]。

Proparoxyton でも pénultième の弱音節の母音が脱落し，子音十流音を支えるために語末の母音が保たれた。

Essĕre > estre 2[21], alteru > autre 13, arbŏre > arbre 389, *sŭffĕrit > sueffre 560.

この語末の母音 e は insĭmul > ensamble 435, traditor > traitre 201, uter > outre 870 では語末の母音の脱落から生じる子音群を支える母音ともなった。

Térmĭnù > terme 32, *met-īpsimù > meïsme 198 などに於ては第2のアクセントが母音を保護したと考えられる。一方，quaerre > querre 169, claudĕre > clorre 477, ĭter > oirre 915 などの場合は r の重複子音を支える母音として e が保持されている。

更に，cognĭtu > cointe(s)43, comĭte > conte 76 に於ては pénultième の母音の消失が遅れたために語末の母音が残された[22]。

Sĕĭor > sire 60 では単音節の語尾が弱まり脱落するのを防ぐために r の後に e が付加されたものである[23]。

Comme 18 の語尾 e は quomo (<quomodo) の o に由来するのではなく，quomo とラテン語の接続詞 et との複合によって現われた語尾である[24]。

B. 無強勢母音の保持

1. ラテン語の語末の a は弱音化して ẹ となる(1)。

Hōra > eure 24, terra > terre 170, anima > ame 211, *fallita > faute 321, via > voie 362, *targa > targe 390, septimana> semaine 454, lacrima > lerme 469, bella > bele 613, mē(n)sūra > mesure 884.

動詞の屈折語尾 -t, -nt などの前の語末の a も同様である。

Prĕcat > prie 100, portat > porte 116, trémulant > tramblent 179, *pŏssiat > puisse 259, audiat > oie 437, vivat > vive 552.

---

(20) Cf. Fouché, Phonét., pp.505–6.

(21) Cf. Prendĕre > prendre 175, pendĕre > pendre 176, perdĕre > perdre 327, *rendĕre > rendre 466. その他，-ĕre 動詞はすべて -re の語尾となった：Facĕre > fere 96, dicĕre > dire 131, credĕre > croire 244, *tragĕre > trere 322.

(22) Cf. Fouché, Phonét., p. 507 : Bourciez §14, 3°.

(23) Cf. Fouché. Phonét., p. 654.

(24) Cf. Fouché, Phonét., p. 506.

(1) 語末の a > ẹ の変化は7世紀末から8世紀に起こったと推定される。その後，この ẹ は15世紀に唇音化して [oe]（[ə]）となり，語の子音構成などによって一様ではないが，17世紀の初めまでに脱落する。Cf. Bourciez, Phonét., §12 ; Fouché, Phonét., chap. XII.

直接法半過去と条件法の語尾 -oie, -oies, -oient; estre と avoir の接続法現在 soie, soies, soient; aie, aies, aient の語末の母音も弱音化する[2]。

*Potébam > pooie 175, *farēa > feroie 176, (es)ser(e-hab)ébam > seroie 222, habébam > avoie 328, *morir(e-hab)ébam > morroie 501, *sap(i)ébam > savoie 502, *amébam > amoie 739.

しかし，三人称単数では語末のaは他の人称よりかなり早い時期に消失する。

*Mitteréat > metroit 32, *movréat > mouvroit 33; tenébat > tenoit 45, ven(i)ébat > venoit 46; hábĕat > ait 151, *sĭat > soit 184.

更に，trácta > traite 567 など過去分詞の女性形にも語末の母音aの弱音化がみられる。

2. アクセントのある音節に先行する語間のaも語末のaと同様にęに弱まる：Sacraméntu > serement 219. しかし，caballáriu > chevalier 19 は caballu > cheval とのアナロジーによってaが保持された[3]。

Mīrābĭlia > merveille 82 では母音aが消失している。Block-Wartburg の Dictionnaire Etymologique によると，このaはそれを囲む二つのiに同化されて *mīribilia となり，更に，それにつづく二つのiに同化されて消たえとしているが，Fouché は，rとvの間でこのaはęに弱音化して消失すると推定している[4]。

-are 動詞の未来形と条件法の形成では，-are のaは常にアクセントのある母音の前に位置するためにęとして保持される。

*Vindicarát > vengera 106, *dēmandaréa > demanderoie 221, *inodiarát > anuiera 370, *assimularáont > assambleront 373, *durarát > durera 452, *amaráio > amerrai 493, *celarát > celera 679.

Leroie 321 の不定詞 laier の語源には定説がない[5]。

動詞の語尾 -ent, -unt の母音は後につづく子音群を支える。

Sáp(i)unt (*sápent)> sevent 6, fécĕrunt (>ficerunt)> firent 40, jacuerunt > jurent 434.

Amavĭstis (amastis) > amastes 580 に於ては，二人称単数 amavĭsti (amásti)>amas との語形の対比を求めて -st- を保持すると同時に，難しい語末の -sts- の発音を避けるために語末の母音が保たれた[6]：Dixĭstis > deistes 202[7], audĭstis > oistes 625.

同様に，amássem > amaisse 803 は amasti > amas との混同を避けるために語末の母音を

(2) これらの語末母音は12世紀から無音化する。Cf. Fouché, Phonét., p. 517.

(3) Cf. Bourciez, Phonét., § 17, R.III.

(4) Cf. Fouché, Phonét., p. 511.

(5) Cf. Fouché, Le verbe, p. III.

(6) Cf. Fouché, Phonét., p.504.

(7) 直接法現在 dīcitis > dites 75 に於ける語末母音の保持は統辞上の理由による。Cf. Fouché, Phonét., p.507.

保った amasses > ama(i)sses による。この語末の母音の保持によって，同じ接続法半過去の一・二人称単数間の混同も避けられた。

Donássem > donnaisse 128, fú(i)ssem > fusse 192, dixíssem > deisse 207, fecíssem > feïsse 208, *tenissem > tenisse 247, *pre(n)sissem > preisse 777, perdissem > perdisse 778, pensássem > pensaisse 793, durassem > duraisse 804, vidíssem > veisse 807.

3．語頭の母音

語頭音節中の母音は一般に保持されるが，prĕhendĕre > prēndere > prendre 175 では語頭の e が縮約されている。その外，一つの子音とそれにつづく r に狭まれた母音が消失する場合がある。Dĭrectu > droit 854 では ĭ は ẹ に開いて（5世紀）から消失したので，第一音節の母音は r につづく同じ音色の母音に先行している。

*Veraia > vraie 134 は統辞上の理由による。つまり，lo vrai Dieu のように冠詞が先行し，実詞をともなう場合が多いことと，副詞 v(e)raiement の ẹ がいちはやく無音化したために verai の頭母音が縮約された[8]。

ラテン語の複合語に由来する次のような語にも語頭の母音の消失がみられる。

Ecc(e)-illla > cele 29, ecc(e)-hŏc > ce 61, ecc(e)-istu > cest 130, ecc(e)-hac > ça 243.

指示代名詞に由来する定冠詞：Ĭllu > le 7, ĭlla > la 20. 更に，副詞 illác >là 508 でも頭母音が消失している。

動詞 estre の条件法 *esser(e)-éat > seroit 25, 未来形 *esser(e)-át > sera 371 でも同様である。

語頭のA（古典ラテン語の ā, ă）

a) 語頭の母音 a は自由母音でも拘束母音でも一般に変化しない。

Valōrem > valor 44, habēre > avoir 90, naturalis > natural 98, *gardinu > jardin 378, parabola > parole 403, *asséssī > assis 531, adventura > aventure 544, talentum > talent 695, sarcophagu > sarqueu 937[9], assaltu > asaut 956.

未来形 fera 232 が *fare-át > *fara にならなかったのは，si fera, non fera の語群で，*fara の語頭の a が，語中の prétonique の母音の如く扱われて e に変ったと説明される[10]。

Gravare > grever 781 の頭母音 a の変化は grave > *greve(> grief 141) の影響である。*Transpassat > trespasse 274 では接頭辞 tra(n)s は *de-trás > detrés のような結合でアクセ

(8) Cf. Fouché, Phonét., p.510.

(9) 中代フランス語期に，子音の前の ar/er の発音にまよいが生じ，a が e に変り，近代語では cercueil と言う。Cf. Bourciez, Phonét., §88, R.III.

(10) Cf. Fouché, Phonét., p.425 : Bourciez, Phonét., §88, R. III.

ントが置かれていたので très となった[11]。

b) 語頭の母音はアクセントのある母音或はアクセントのない他の母音と同じように，それにつづく鼻子音が外破音であっても内破音であっても，鼻音化する。しかし，鼻子音が外破音である場合は，鼻子音の鼻音性が弱いために，その後，再び口母音化する[12]。

Amare > amer 79[13], cantĭōne > chanson 294, angŭstia > angoisse 303, mandŭcare > mengier 509, sanĭtáte > sante(z) 780.

c) Lが子音の前で母音化すると[14]，語頭のaと結合してau〔o̯〕となる。cf. 脚註 (53)。

*Mal(i)fatius > mauvés 302, *al(i)-sic > ausi 821.

d) 語頭のc＋aはaが自由母音であればęに閉ざされ，その後ę̥に弱まる[15]。

Caballáriu > chevalier 19, camīnu > chemin 377, *cadēre > cheoir 730.

e) 語頭のaはそれにつづくyodと結合して（或は子音＋yodの場合は子音の前に浸透して現われるyodと結合して）ai̯となり，ęに単母音化し，更にęに閉ざされる[16]。

Ratiŏne > reson 59[17], sacramentu > serement 219[18], *facēbat > (< faciēbat) > fesoit 446[19], jacēre > jesir 569[20], laxare > lessier 770.

Pāgē(n)se > païs 7 では，母音に先行されるg＋eがyodを生じ，gye > yę́ のęが二重母音化して三重母音 yei̯ となって後，eが前後の母音に同化してiとなり，母音接続が保たれたが，その後 ai̯ のaはiに同化して閉音化した：ai̯ > ęi > ęi̯.

---

(11) Cf. Bourciez, Phonét., §35, R. IV；§88, R. IV.

(12) 語頭の無強勢母音も強勢母音も，同じ時期に鼻音化したとすれば，このa > ãは10世紀であり，口母音化も内破音の鼻子音nの消失も，中代フランス語期である。

(13) 近代語 aimer の語形はaime < ámat のアナロジーである。鼻子音の前の自由母音aは，アクセントがない限り ai とはならない。Cf. Bourciez, Phonét., §88, R. II.

(14) この1の母音化の時期は，Fouché によれば，11世紀末である。Cf. Phonét., p. 318.

(15) Fouchéはこのaがęに閉ざされるのは，ガロロマン期であり，アクセントのあるaや語中の prétonique のaがeに閉ざされるより後のことだと述べている。Cf. Phonét., pp.448-9.

(16) ai̯>ęi̯>ę>ę̥. 二重母音 ai̯ の第一要素aが，iの同化作用によってęに変化したあと，今度は，iがęに同化され単母音化してęとなる。Fouché によると，12世紀からのことである（cf. Phonét., p.258.）。その後，このę̥はもう一度ęに開く。近代語では[rɛzõ]，[sɛrmã] である。

(17) -ty- は口蓋化して -tsy-となり，更に，有声化してから，yod がその前に浸透して現われる：Ratiŏne > *ratsyŏne > *radzyōne > *raydzyōne. 近代語 raison の綴りはこの過程をとどめている。

(18) Serement は sairement の新しい書法である。

(19) Fesoit（近代語 faisait）は16世紀末から [fęzę] と発音されたが，その後，未来形 ferai の影響をうけて [fęzę] となった。Cf. Bourciez, §90, R.I.

(20) Gesir [žęzir] は13世紀頃 *jaizir [žęzir] が弱音化したものと思われる。しかし，16世紀以後は反動として再び元の強音母に戻される。Cf. Lanly, Fiches, p. 185.

Gesir の半過去 jacébat > gisoit 728 でも語頭の a は二つの yod と接して *dzyaị- >*dzyẹị- > *dzyẹị- となり，この yẹi にアクセントのある語の影響をうけて i となったものと思われる。

なお，sanguinatu > sainié 900 では，n＋yod＋母音の前の語頭の a が，鼻子音の前に浸透して現われる yod と結合して ai〔ẹ〕となった。Cf. 脚註B，(16)。

f) ラテン語の子音の消失によって語頭の a がアクセントのあるüの前でẹとして保持される[21]。

*Habūta > eüe 163, *sapūtu > seü 329, *tacūtu > teü 657.

*Traditione > traïson 96, *tradītōre > trahitor 124, haïr (< hatjan) 152, *hatina > haïne 795 では子音が脱落してから語頭の a はそのまま保持された[22]。

語頭の E（古典ラテン語の ĕ, ē, ĭ）

a) 語頭のẹが自由母音であるときはẹに弱音化する[23]。

Venísset > venist 36, *demorare > demorer 36, tenēbat > tenoit 45, dēmando > demande III, *minare > mener 289, vĕnire > venir 394, celāre > celer 947, debéat > devoit 947.

Dēsīdĕrat > desire 225, *fremíĭt > fremist 690, *feriit > feri 898 などでは，16・7世紀の学者の反動によって再び désire, frémit, férit となった。

接頭辞 des-（<dĭs-）は子音の前でẹを保持する：Discópĕrit> descuevre 5. なお，defendo> desfent 172 はこの接頭辞のアナロジーである[24]。

b) 語頭のẹが拘束母音であるときはẹとなる[25]。

Vercundia > vergoingne 17, mercēde > merci 61, *sedréat > serroit 65, *mistériu > mestier 717, *fellóne > felon (s) 957.

しかし sĕptimana > semaine 454 では，ẹに弱音化している[26]。

---

(21) このaは8世紀頃ẹに弱音化し，その後 oe に唇音化してから，12世紀の末以降15世紀後半までの間に無音化する：au-> ẹü-> [oeü]-> [(oe)ü]-, Cf. Fouché, Phonét., p.520.

(22) Haïne は3音節の語である。その後，i は最も広い開母音の影響をうけて音の狭さが弱まり，ẹとなってaを同化し，近代語の haine [ɛn] となった。：Haïnẹ> haẹnẹ> hẹẹnẹ> hẹnẹ (cf.Bourciez, Phonét., §91, H. しかし，haïr の場合は，語尾を保護するために，この母音持続の融合は起こらなかった。近代語 trahison のhの綴りが示すように，traïson でも母音接続が保たれたのは，この haïr の影響であろう。

(23) e>ẹへの変化は8世紀である。その後，このẹは15世紀中頃までに唇音化し，脱落する。Cf. Fouché, Phonét., pp. 430-1, 516.

(24) Cf. Bourciez, Phonét., §92, R.I.

(25) 閉音節のẹはそのまま保持されてのち，12世紀後半ẹとなる。Cf. Fouché, Phonét., p.430.

(26) Sept(i)mana > *setmana > *semmana では，語頭の音節が二重子音-mm-によって閉音節であるにもかかわらず，ẹとなるのは，二重子音の縮約がẹ>ẹより先に起こったためである。Cf. Fouché, Phonét., p.431.

なお，*bell(i)táte > beauté は形容詞 bĕllus > beau とのアナロジーである。

c) 語頭のe＋鼻子音（内破音でも外破音でも）は鼻音化してãとなり，en, em, an などの書法で表わされる[27]。

*Venireat > vendroit 31[28], *inodiu > anui 57[29], pensavit > pensa 105, *vindicarat > vengera 106, invidiōsus > envious 201, intendit > entent 391, intrare > entrer 392, insimul > ensamble 434, inversus > enverse 863.

d) 語頭のeは，自由母音でも拘束母音でも，特に流音の前で，aになることがある。

Perjurus > parjurs 266, *perdono > pardon 827[30].

e) Prĕcare > proier 127, lēgale > loial 892[31], medietate > moitié 761 の場合は語頭のẹ＋yod が結合して ei̯>oi̯ と変化し，13世紀には oi と綴られ〔wẹ〕或は〔wa〕と発音された。

しかし，ĕxire > issir 393 では，ĕxit > ist の如き語幹にアクセントをもつ語形の影響をうけて，eissir (oissir) が issir に変った。

Proier が近代語 prier に変容するのも，同様のアナロジーによるものである[32]。

f) 語頭のẹが yod によって湿音化された l̥, n̥ の前にあるときは，ẹは拘束母音となり，ẹに開き (cf. b))，-ill-, -ign- と綴られる。

Sĕniōre > seignor 93, meliōre > meillor 886, vigilavit > veilla 149.

g) 子音が脱落して，語頭のẹが他の母音と接続すると，ẹは他の語頭の自由母音ẹの如く，ẹに弱音化する[33]。

Videtis > veez 71[34], credutu > creü 160, sēcūra > seure 193, *met-īpsimu > meïsme 198[35], *aetáticu > eage 336, vidĕre > veoir 521, *viditu > veü 658[36],

---

(27) eの鼻音化も10世紀であるが，aの鼻音化より少し遅れる (cf. Fouché, Phonét., p.358.)。ẹは ẽに鼻音化してのち，11世紀に ẽ > ã に開く。

(28) 近代語の viendrait は現在形 vient によって作られた語形である。

(29) 鼻子音が外破音である場合は，鼻母音は16世紀に口母音化する (cf. 語頭の A.b))が，近代語 ennuiの語頭にはアナロジーによって鼻子音が残されている。これは数少ない例外である。

(30) 前置詞 par (<pĕr) は，pĕr ad の語群の同化現象によって説明される。*Par ad から単独でも parとなり，perdonare が *pardonare に変えられたことから pardonner となった。Cf. Fouché, Phonét., p.454.

(31) e＋口蓋音＋aの場合は，口蓋音に影響されてaがẹに閉じられ，二重母音化してieとなり(Bartschの法則)，二重母音の第一要素が先行する母音eと結合して ei̯ を形成し，更に oi̯ > [wa]へと変化する。

(32) Cf. Bourciez, Phonét., §95, R. II.

(33) その後，eが唇音化して消失するのも，他の語頭の自由母音eと同様である。Cf. 脚註B, (23)。

(34) Veez は強語幹人称の語形とのアナロジーによって，15世紀頃 voyez となった。Cf. Bourciez, Phonét., §96, R. II.

(35) 近代語 même の語源は *met-ípsĭmu であるが，meïsme は Bourciez (§96, R. I.) に従って，*met-ípsĭmu を語源とした。

(36) Cf. 脚註B, (21)。近代語では，過去分詞 -eü のeは habutu > eü 以外ではすべて書法から除かれた。

laetitia > leece 780[37].

Rēgīna > roïne 796 は例外である。[rẹine] は12世紀に régem > rei/roi の影響をうけて，rei/roi の如くアクセントが e/o の上に移動し，[réi̯nẹ] > [rói̯nẹ] から *[róẹnẹ] > *[roénẹ] [rwénẹ] へと変化した。近代語の reine [reinə] は語源への反動である[38]。

語頭の I（古典ラテン語の ī）

a) 語頭の ī は，自由母音でも拘束母音でも，一般に変化しない。

Fidare > fïer 4, villana > vilaine 97, vivénte > vivant 331, īre-habeo > irai 368, fīdéntĭa > fïance 606, līberáta > livree 826.

しかし，*primaria > premiere 683 では ī が ẹ に弱音化している。Dicere-(hab)ēbam > *diréa > diroie 133 の如く i＋yod では i が yodを吸収する。

b) 語頭の i がアクセントのあるもう一つの ī に先行している場合は，逆行異化によって語頭の ī は俗ラテン語期に ẹ に変り，その後 ẹ に弱音化する。

Dīxístis > deïstes 202[39], mīsísset > meïst 249, vidíssem > veïsse 807[40].

語頭の O（古典ラテン語の ŏ, ō, ŭ）

a) 語頭の o は，遅くても13世紀までに，[u] に閉ざされるが，テキストでは o と綴られることが多い[41]。

Sŭbĭnde > sovent 15, dŏlōre > dolor 17, Bŭrgun(d)ia > Borgoingne 18, de-mŏrare > demorer 36, plōrare > plorer 110[42], tŏrmentum> torment 235. sōla-

---

(37) 近代語 liesse は形容詞 laetu > lie 312 の影響である。

(38) Cf. Lanly, Fiches, pp.302-3.

(39) 二人称単数 dīxístī の屈折語尾 -ístī の短母音 ĭ が，語末の長母音 ī の同化作用によって，或は同時に他の動詞とのアナロジーによって，ī に閉ざされ，-ístī となったことから，二人称複数でも，-ĭstis が -īstis に変り，異化作用 i-i > e-i によって，語頭の ī が e に変った。Dixīstis > *dēxístis > *dēysístis は*fecīstis > fesistes の語形とのアナロジーによって，*deisistes ではなく，desistes となって現われ，更に，veïstes の語形に影響されて，s sigmatique が消失し，deïstes となった。なお，deistes から distesへの移行については，単に母音接続の縮約によるとも，或は強語幹人称 dis, dist, distrent の影響によるとも考えられる。Cf. Fouché, Le verbe, pp. 272, 287-8；Phonét., p. 600；Nyrop, t.2, §182；拙論「強変化型定過去の形成に於けるアナロジーに関する人称間の連帯性について」杉野女子大学紀要15号，p. 146.

(40) これらの接続法半過去では，定過去の影響によって，ラテン語の接続法大過去の屈折語尾 i が保持され，これが上述の定過去の如く，異化作用によって，mīsĭsset > *mīsísset > *mesísset > meïst, vīdíssem> *vīdíssem > vedíssem > veïsse と変化した。Cf. François De La Chaussée, Initiation à la morphologie historique de l'ancien français, p.292.

(41) Fouché は，この変化を11世紀とし（Phonét., p.426.），Bourciez は，アクセントのある拘束母音 o とほぼ同じく，13世紀中としている（cf. Phonét. Phoné t., §99, H.）。

(42) 近代語の demeurer, pleurer は語幹にアクセントのある語形 *de-mŏrat > demeure, plŏrat >pleure とのアナロジーによる。

cius > solaz 285, dormire > dormir 434[43], forti-mente> forment 467[44], volere> voloir 564, volŭntáte > volenté 634[45], *pŏtēre>pooir 787[46], mortalis>morteus 881[47].

*Por-pensâvi > porpenssai 132, *por-captiat > porchace 309 などにみられる接頭辞 por-は pro- の音位転換であり，pourchasser は近代語である。

しかし ou と綴られることも少なくない。

Mover(e)-(hab)ébat> mouvroit 33, suspīrare > souspirer 109, mostravit > moustra 510, *sufferir(e)-(hab)ēbam > soufferroie 614, volsĭsset > vousist 950.

b) 語頭の o に yod がつづくと，両者が結合して oi と綴られ，13世紀には [wa] と発音される：*Ad-pŏdiátus > apoiez 421[48].

Cogĭtátis > cuidiez 318 は例外である。Cōgĭtátis は ō にアクセントがある場合と同じように，*coyyĭtatis に変り，-yy-の作用で o が ū に閉ざされた[49]。

c) 語頭の o はアクセントがある場合と同様に，それにつづく鼻子音が内破音でも外破音でも，鼻音化してon, om [õ] となる[50]。

Consiliu > conseil 3, donata > donnee 85[51], nōminá(vi)t > nomma 126, contrata > contree 229, considerare > consirrer 295.

語頭の u（古典ラテン語の ū）

---

(43) 近代語では，souvent, douleur, Bourgogne, tourment, vouloir の如く ou と綴られるが，dormir は dŏrmit > dort とのアナロジーにより o が保持された。

(44) 同様に，近代語の fortement も forte > fort の影響である。

(45) 書法はこの o から [u] への音韻変化に常に一致するものではなかったし，中代フランス語では，俗間の発音の外に，学識語としての発音があって統一を欠いた。近代語の volonté は，音韻変化に反して採用された多くの語の一つである。

(46) *Pŏtēre > poeir > pooir は母音間の子音の消失によって，o と e(o) が母音接続を成したが，15世紀頃，avoir, devoir とのアナロジーによって，両母音間に v が現われ，母音接続が消え，近代語では pouvoir となった。なお，potuĭsset > peüst 51 の場合は，-tŭ- が -tw- >-dw- > -ww- と変化し，この両唇軟口蓋音の二重子音によって唇音化された母音 i > u > ü が，更に語頭の o を唇音化して [œ] とし，peüst (poust) と綴られ，その後，この [œ] が消失して，近代語では，pût [pü] となった：Pŏtŭĭsset> *potwĭsset > *podwĭsset > *powwĭsset > *powwússet > *poẅússet > po(ẅ)ússet > [poússet] > [pœússet] > p(œ)üss(ę) > [pü] (cf. Lanly, Fiches, p. 278.).

(47) 近代語の mortel (< mortale) は mŏrte > mort とのアナロジーによって o が保持された。

(48) *Ad-podiare > apoier は語幹にアクセントのある語形 *adpŏdiat > appuie とのアナロジーによって，近代語では appuyer となり，過去分詞も同様に appuyé となった。

(49) Cf. Fouché, Phonét., p. 415.

(50) ǫ は12世紀後半，鼻音化して ǫ̃ となり，13世紀には õ に開く。

(51) Donata の如く，o が自由母音であるときは，鼻音化したあと，中代フランス語期に口母音化する。重複子音 -nn- はこの鼻音化の名残りである。

語頭の ū はアクセントがある場合のように，ü に唇音化する[52]。

Dūráre > durer 301, *pullicélla > pucele(te) 727[53].

語頭のAU

語頭の au もアクセントが置かれる場合と同じように，o [ǫ] に単母音化する[54]。

*Gaudire > joïr 181, aurícŭla > oreille 846, audire>oïr 928[55].

---

(52) u > ü の口蓋化は8世紀である。Cf. Fouché, Phonét., p.205.

(53) 古典ラテン語の pŭllicélla が何らかの影響をうけて pūllicélla に変ったことを前提とするなら，先ずアクセントのある母音の前の ĭ が消失し，その前にある -ll- が -l- に単純化され，子音の前の c + ę が口蓋化してから，この l が子音の前にあって，母音化しながら語頭の ū に吸収された：*Pūllĭcélla > *pūlcę́lla> pulkyę́lla > pultsyę́lla > pultsę́lla > pü(l)tsę́llę > püsę́llę. Cf. Lanly, Fiches, pp.295–6. なお，テキストに現われる pucelete の語尾 -ete は -ĭtta に由来する指小辞である。

(54) au̯ > ǫ の単母音化は5世紀の後半である（cf. Fouché, Phonét., p.297.）。最初に，二重母音の第一要素 a が u を同化して ǫ とするが，a はこの ǫ に唇音化され，同化されてしまう：au̯ > *aǫ > *ǫ̊ > ǫ .

(55) Joïr や oïr のように，この o がそれにつづくもう一つの母音と母音接続を成す場合は，ǫ はのちに [u] に変化し，ou と綴られ，近代語 jouir, ouïr の語形が現われる。Cf. 語頭の O, a)。